

# 帝京科学大学古瀬研究室、最近の卒研から（2022年）

古瀬浩史（帝京科学大学）

キーワード：卒研、発問、俳句、環境教育

## はじめに

帝京科学大学古瀬研究室は、環境教育とインタープリテーションを中心テーマとする研究室です。担当教員が、自然系インタープリテーションの計画や実践、人材育成を専門にしてきましたので、学生の卒業研究も、それに近い分野の研究や教材の開発等が取り組まれています。卒業研究には、結論を主張するには少しデータが足りていないと感じられるものや、詰めが甘いものもありません。また、学生は提出とともに社会に出ていくため、学会等で発表したりする機会をなかなかつくることができません。しかし、埋もれさせるにはもったいない成果もたくさんあります。私達の研究室では「誰かの何かの役に立つ」ことをモットーに活動や研究を行っていますので、1年間の成果を社会に還元してはじめて卒研活動が完結すると考えています。そこで成果を、積極的に紹介したいと思っています。2022年度に提出された卒研は、3月に行われた「やまなし環境教育ミーティング2022」でポスター発表を行いました。インタープリターズフォーラムでは、その中から、特にインタープリテーションに関連している2題を紹介いたします。論文のフルバージョンは、古瀬研究室のサイトにも掲載されていますので、そちらでもぜひ御覧ください。

## インタープリテーションにおける発問の研究

加藤 夏美さん

### <要点の箇条書き>

- ・ 発問は、パーソナルインタープリテーションの質を大きく左右する技術だという考えから、発問について調査した。
- ・ ビギナーによるトークプログラム10例と、ベテランインタープリターによるトークおよびガイドプログラム2例から、解説の中に含まれる「発問」を抽出して分析。
- ・ 「クローズドクエスチョン」の割合 → ビギナーでは83%、ベテランは69%
- ・ 「知識を問う問い」の割合 → ビギナーでは83%、ベテランでは11%
- ・ ビギナーとベテランでは発問に大きな相違。
- ・ 解説の中での「発問」の機能について、解説者（ビギナー）の自己評価と第三者の評価の間に大きな相違があった。
- ・ ビギナーでは、解説の中で「問い」が意図的に作られていない可能性がある。
- ・ 「発問」を改善するトレーニングが有効ではないか。

指導教員コメント：ビギナーとベテランで「発問」に大きな質的な違いがあることや、ビギナーが「意図的に」発問を計画していないことが示唆されており、これらの成果はインタープリターのトレーニングの場にフィードバックしつつあります。今後同様の調

査でデータ数を増やしたり、「意図的な問いを考える」練習プログラムがどのようにプログラムの改善につながるかを、次の代の卒研で取り組んでもらいたいと考えています。

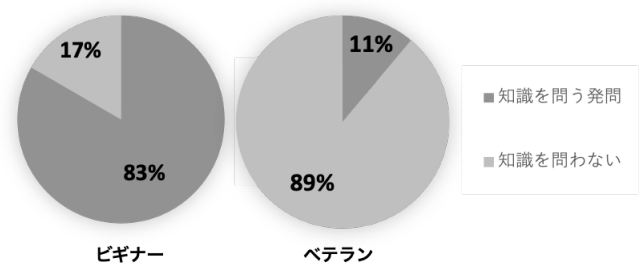


図. 「クローズドクエスチョン」のうち「知識を問う」発問の割合

## 「俳句」を用いた環境教育プログラムに関する研究

藤本 夏生さん

### <要点の箇条書き>

- ・ 俳句を用いた環境教育プログラムとしてもっとも古い文献上の記録は、日本では1991年、英語圏では1971年。
- ・ 日本の事例では、キープ協会が先進的に環境教育事業に取り組んでいた川嶋直氏（現日本環境教育フォーラム理事長）が、高田研氏（現都留文科大学）らと1991年に行った「清里自然塾」が最も古い。
- ・ 川嶋氏や、高田氏はその後も俳句を用いたプログラムの実践や紹介をおこなっており、これらがリーツの一つになっていると考えられる。
- ・ 当時、川嶋氏らは、科学だけでなく芸術的な感性にフォーカスしたプログラムや、日本文化を取り入れた活動を模索していた。川嶋氏が直接的な着想を得たのは、1991年5月に朝日新聞の「折々のうた」に掲載された小学6年生が書いた俳句、「もみじの葉 泳げば魚 飛べば鳥」という句であった。
- ・ 英語圏では、俳句を用いた環境教育の事例が、最も古いものでは1971年にあり、日米とも、環境教育の黎明期に俳句が採用されている。
- ・ 句会形式のプログラムは、伝統的な自然観察との親和性も高く、「視点を変える」「表現する」「共有する」といった環境教育で大切にされる要素が含まれている。
- ・ 俳句を用いたプログラムはルールの単純化のために、季語のルールを用いない事が多い。「季節の巡り」に着目する俳句の特性を活かすには、季語を積極的に活用したプログラムも考えられるのではないかと。



図1. 日本と英語圏における俳句を用いた環境教育プログラムの年代別文献数

指導教員コメント：環境教育での俳句の活用が、英語圏において日本の20年も前から行われていたことにまず驚きました。日本の環境教育における俳句の活用は、英語圏からの逆輸入かもしれないと想像しましたが、そうではないことも明らかになりました。筆者の言うように、季語を積極的に活用したプログラムにも可能性があると感じます。

藤本さんは当初、「俳句」を活用したプログラムの開発を研究テーマとして着想していましたが、すでに実践事例が多くあることを知り、既存の俳句プログラムに関する研究に切り替えて取り組みました。俳句に関する国内外の古い文献を大学図書館にたくさん依頼したため、司書さんには「俳句の人」と呼ばれていました・・・。

---

※これらの卒業研究の論文は、以下サイトに掲載されています。  
 古瀬研究室ホームページ：<https://www.furuse-lab.com/>